15年度育友会定期総会――

新役員を選出

2015年度育友会（髙野雅夫会長）定期総会が6月6日、生田キャンパスであった。育友会員、専修大学役員、教職員ら170人が出席、15年度事業計画を承認し、新会長に本多英夫氏を選んだ。

髙野会長が「国際交流会館の完成など目に見える形で大学は変わっている。また、野球部の活躍など父母にとっても楽しい話題が多い。これからも校友会と手を取り合って、わくわくする専修大学を作っていくサポートをしたい」とあいさつ。

矢野建一学長は「育友会と大学との歴史はゆうに半世紀を超える。学生の学びのためにもご父母・保護者との緊密な連携が必要になる」と述べた。

日髙義博理事長は「東日本大震災後、被災学生の支援、キャンパスの整備を行っている。今後とも協力をお願いしたい」と呼びかけた。

議事では14年度事業・決算報告、本年度事業・予算計画を承認。本年度も例年同様▽学生支援の強化▽大学・校友会との連携強化▽支部活動の充実―などを柱に活動する。また18年に育友会創立60周年を迎えることから、60年史刊行に向け準備を始める。

役員改選では会長、副会長、監査役の18人を選出。新会長に就任した本多氏が「サポーターとして学生を支援していくために、私たち保護者同士がよく知り合い、自由に論議していきたい」と抱負を語った。

最後に退任役員を代表して髙野氏が、これまでの育友会員の支援と協力に感謝を述べた。「野球部の試合には、卒業した前役員が小旗を持って駆けつけてくれた。たまたま子どもが専修大生だったことが縁でたくさんの友人ができた。5年後の東京オリンピックでは皆さんと一緒に小旗を持って、専修大生、専修大OBを応援したい」と話した。

7日には神田キャンパスで本年度第1回全国支部長会があり、全国67支部の役員ら115人が出席した。

▲　本年度事業計画などを決めた育友会定期総会

育友会　新会長

本多（ほんだ）　英夫（ひでお）さん

学生を全力で支援

「大学が手厚いプログラムを用意しており、学生にはたくさんの選択肢がある。4年間の学生生活で何でもやってみて、やりたいことを見つけてほしい。親や育友会はそれを全力でサポートする」と柔和に語る。

次男が商学部マーケティング学科4年に在籍。入学時から誘われて育友会活動に参加し、スポーツ応援や父母同士の集まりで親睦を深めてきた。2年間の副会長を経て、本年度会長に就任した。

自身も専修大の卒業生（昭57商）。だが在学中は育友会の活動はほとんど知らなかったという。商業学科で、3年次生からは年2回のゼミ対抗の討論会のため勉強に明け暮れた。「討論会で侃々諤々（かんかんがくがく）やったおかげで、社会に出て、筋道立てて考える力がついた」と振り返る。

スポーツ観戦はそのころからの趣味。神宮球場で何度も校歌を歌った。今年の東都大学野球春季リーグも次男らと2度応援に駆けつけた。優勝が決まった試合は仕事で観戦できなかったが、かつてのゼミ仲間らからお祝いメールが多数届いた。「スポーツが盛んだと、学生も一生懸命になり、大学の知名度も上がる。それが父母にとっても学生にとっても誇りになる」として、育友会でもさまざまなスポーツの応援に力を注ぐつもりだ。

学生生活の支援では、本年度、育友会奨励賞の応募要件を緩和する。「学業でもクラブ活動でも、自分の成長の証を書いて応募してほしい」と呼びかける。

7月4日にはご父母・保護者向けの就職懇談会を開催する。次男も就職活動中だが「我々の時代と活動がまったく違う。あまり口うるさくしないようにしています」。一方で「親としてアドバイスできることはたくさんある。懇談会では様々な情報を得て、同じ悩みを持つ親同士語り合ってもらえれば」と話す。

経理畑で外資系企業を中心にキャリアを重ねてきた。「今の自分があるのも大学時代の経験のおかげ」と目を細める。

東京都町田市在住。56歳。

チリ代表チームvs専大剣道部

合同稽古と親善試合

専修大学へようこそ――南米チリを代表する剣士が5月25・27の両日、生田キャンパスを訪問。本学の剣道部員と合同稽古（けい）、親善試合を行った。

チームを率いるヘッドコーチの日巻行信さん（昭42法）が本学の卒業生という縁で来学が実現した。

一行は第16回世界剣道選手権（5月29～31日、東京・日本武道館）に出場したナショナルチームで20代前半から30代半ばまでの男女13人。学生や大学教員もいる。同19日に来日した。

25日の合同稽古には専大側は松下吉進監督（昭48法）、石崎徹部長（経営学部教授）ら指導陣と部員約40人が参加。今年3月に完成したばかりの剣道場に熱い掛け声が響き渡った。

参加者は練習で約1時間汗をかいたあと、「日本・チリ親善試合」を行った。

日本に2年間の留学経験がある大学生のトマス・ミランダさん（五段）は、親善試合でチリ側唯一の勝ち星を挙げた。

「世界大会前に日巻先生の出身校で稽古できてうれしい。専大生の歓待には感激した。大会では団体・個人ともベスト8を目指す」と汗を拭いながら笑顔を見せた。

剣道女子部員の中後真里奈さん（文2）は「礼儀正しく、剣道に真剣に向き合っている様子が試合から伝わってきた。良い技には敵側にも拍手を惜しまないフェアな姿勢も素晴らしい」と、チリチームのひたむきさをたたえる。

チリナショナルチームは南米ではブラジルに次ぐ実力を持つ。世界選手権でも健闘。2013年からJICAシニア海外ボランティアとして首都・サンティアゴで剣道の指導をしている日巻さんは「ナショナルチームには日本留学者も多い。実力は、世界レベルではまだまだだが、稽古に熱心に取り組んでいる。チリは日本にたいへん親しみをもっている友好国。日本の文化やスポーツは人気が高く、剣道人気も上がっている」と話す。

▲　親善試合で日本とチリの激闘

SI Libretto 第6弾

「日本語の風景」刊行

専修大学選書「SI Libretto（リブレット）」から「日本語の風景―文字はどのように書かれてきたのか―」（専修大学図書館編＝写真）が4月、刊行された。

刊行は、2011年開催の図書館特別展「和（やまとし）うるわし―日本の文字と書物の歴史」が好評を得たことを背景としている。特別展では資料の展示と関連した内容の講演会が実施され、市民や大学関係者から大きな反響を呼んだ。また、図録が本学のみならず他大学でも教材として使用された。こうしたニーズを踏まえ、広い読者層を想定して書籍刊行を企画した。

本書は5章からなり、特別展講演会の講師を中心に、書家として活躍する本学文学部の仲川恭司教授、斎藤達哉教授らが執筆。大庭健教授（前図書館長）が序文を記した。主要な資料を厳選し、図版を交え読み物として再執筆。漢字の伝来から、その後の日本語がどのように発展してきたのか、文字と表記の歴史を考察するなかで、日本語の文字の世界の奥深さを書家、日本語学者がさまざまな角度から説明している。

本書は、SI Libretto第6弾として専修大学出版局が発行。本体900円＋税。

7月1～10日、生田キャンパスの図書館本館で出版を記念した企画展を開催する。7月4日には公開講座が開かれ、斎藤教授が講演する。講座の問い合わせ、申し込みは企画課☎044・911・1252

専修人の新しい本

日本政治のオルタナティブ 憲法を使え！

田村理著

国民に不利益を与えることは「絶対にあり得ない」。

首相が理由を示さずその種の発言を繰り返すとき、国民が求められていることは、それを「信じる」か「信じない」かの二者択一だ。

そして、二者択一は、政治にも社会にも分断をもたらす。分断する日本は「決められない政治」か「独裁」かに大きく振れる。

そんな政治の現実を、特定秘密保護法や共通番号制などの議論にもふれながら描きつつ、この分断から脱する方法を実は日本国憲法が提示していることを本書は示している。

理由もなく「信じる」ことを求められ、分断された私たちの現状に不安を感じる人に読んでもらいたい。（彩流社・本体1900円＋税）

著者（たむら・おさむ）＝法学部教授。主な担当は、憲法人権保障論。

変化する中国の小売業 小売業態の発展プロセス

楊陽著

本書は、中国の小売業の発展について、とくに小売業態（販売方法・営業形態）の多様化がなぜ、どのようにして引き起こされ、その現状がどのようになっているかを明らかにしている。

特徴としては、先進国に共通する小売業態概念の再検討をはじめ、中国特有の業態多様化の仕組みを解明し、さらには新興国の小売市場での小売業態開発への示唆も行っている。

先行研究の活用や消費者アンケートによる実証分析だけでなく、長年にわたり複数の経営者やコンサルタントの方々にインタビュー調査を行い、中国での小売市場における業態の多様化について経営者の取り組みの現状や課題を浮き彫りにしている。

専門分野の研究者だけでなく、中国のビジネスや消費文化について関心をもつ方々にも、ぜひ一読を薦めたい。（専修大学出版局、2400円＋税）

著者（よう・よう）＝経営学部助教。主な担当は、ビジネス研究。